時評

沖縄は特別か

屋良健一郎

「短歌往来」八月号の特集は「歌の力 沖縄の声」。特集の扉の写真は、琉球舞踊の人々の上を戦闘機が飛んでいるという構図になっており、沖縄への幻想と現実との矛盾を衝いていて印象深い。沖縄歌人の作品は、スローガン的、類型的という、幾度となく指摘されてきた基地詠の表現上の課題を（私を含め）克服できていないものも多いが、三本の評論についてはいずれも力作である。沖縄人の心を丁寧に読み解いた渡英子「風土に根差す表現へ」、おそらく多くの人が感じていながら口に出来なかった沖縄との隔たりを率直に指摘した小高賢「歌の弱さと強さ」、本土側からの二つの評論は読者に多くのことを学ばせてくれる。

そして、沖縄短歌史の研究史上、重要な成果が仲程昌徳「沖縄の近代現代の歌」である。仲程には、近代の新聞に掲載された短歌を博捜した『沖縄近代短歌の基礎的研究』という大部の仕事があるが、今回の評論は、それを含めたこれまでの数十年にわたる地道な研究成果に裏打ちされたものであり、今後、沖縄短歌史を論じる者にとって必読文献となることは間違いない。

ところで、いま私が用いた「沖縄短歌史」という言葉に疑問を感じる人もいることだろう。なぜ、わざわざ（一般的な）短歌史とは別に、沖縄独自の短歌史を設定するのか、と。沖縄だけ、特別なのか、と。日本文学、日本史などとは別に沖縄文学、琉球史といった学問分野が存在する。それと同様に、短歌史とは別に沖縄短歌史を設定すべきだと私は考えている。無論、沖縄だけではなく、他の地域でもその土地固有の短歌史が存在するだろう。しかし、日本国内の多くの地域では、おそらく、そこが日本であるから短歌が詠まれてきたのではないだろうか。一方、沖縄では、そこが日本でないために短歌が詠まれてきた、と思う。紙幅の関係上、詳述はできないが、琉球王国の人々は、隣国であり大国たる日本への憧れから、和歌を学んだのではなかったか。日本人が中国文化への憧憬から漢詩を作ったのと似たような感じであろう。ここで重要なのは、琉球人が普段使っていたのは琉球語であり、日本語による和歌創作は非日常的な行為だったという点だ。そして、その後、江戸時代の島津氏の琉球侵攻、明治の琉球処分後の標準語教育を経て、和歌・短歌は普及する。さらに、戦後沖縄の人々は、アメリカ世の中で短歌を詠み続けた。このように、歴史上の長い時間を独立国家として、あるいはアメリカ支配下で、日本とは別個に存在してきた沖縄にとって和歌・短歌という表現の持つ意味は、他の地域にとってのそれとは異なるであろう。沖縄短歌史という枠組みを設定することを必要と考える所以である。

しかし、だからといって、沖縄のことだけを学べばいいというわけではない。仲程の評論でも示唆されたように、沖縄近現代短歌史上の重要な論争である「新派和歌論争」や「九年母論争」は、それぞれ（日本本土での）短歌革新運動、第二芸術論の影響を受けたものであることは間違いない。沖縄短歌史という枠組みを設定しつつも、沖縄を相対化する視点。そのことが、今後の沖縄をめぐる評論・研究・創作にとって重要なのではないだろうか。